

トラック 4-1

昔、ひとりの老婆が男の子と暮らしていたがそれは随分前のことだった。その頃老婆は男の子とやっとのことで生活していたが、神のお助けで雌山羊を一匹手に入れた。雌山羊を見つけた後、彼らはそれを育ててそこで生活し、雌山羊は少し大きくなった。それから老婆は、雌山羊に子を産ませるために雄山羊を見つけに出かけた。彼女が聞いたところでは、この町で種付け用の雄山羊を持っているのはスルタンだった。

「でも、どうやって一文無しの私がスルタンのところに行けようか」。

回りの人たちに助けを求めると、出会う人すべてが他のところで聞いてくれという。彼女がやっひとり老人を見つけると彼が言った。

「さあ来なさい。あんたの雌山羊を孕ませるのにスルタンが雄山羊を貸してくれるよう、一緒にスルタンに会いに行こう」。

彼らは一緒にスルタンに会いに行き、老婆は事情を説明した。スルタンは

「こいつを連れていって、お前の雌山羊に子供をませろ」

と言って、雄山羊を彼女に貸し与え、こうして老婆は雌山羊に子供を生ませることができるようになった。彼女はそのまま雌山羊と一緒に、それが子供を産む日まで過ごした。雌山羊は 3 匹の子山羊を産み落とした。

スルタンが何も言っていないので、老婆は子山羊が成長するまで過ごしていた。そうすると、スルタンは老婆の様子を見るために家来たちを送り込んだ。

「ばあさんのところに行って伝えてこい。わしは子山羊を待っている。そいつらが欲しい」。

家来たちは子山羊を取り戻しに出かけ、取り上げてから戻った。

老婆は子供と一緒にそこで貧しいままだったが、ある日ひとりごちた。

「一体ここで何を残してやれるのだろうか」。

彼女は誰かが通りがるのを見た。通りがかった男は、この老婆が座っている哀れな様子を見て言った。

「おばあさん、何があったのか言って下さい」。

「実は、甥が自分の雌山羊を持っていたのだけれど、スルタンに会いにいった雄山羊を貸してもらったのです。そいつは種付けして(子山羊が生まれ)、私らはそのままにしておきました。それを売ったり、何か値打ちのあるものにする前に、スルタンが家来たちをよこして取り上げてしまったのです。これは全部、彼の雄山羊のおかげで生まれた子山羊だからということです」。

「何だって！」。

「そうなんです」。

「じゃ僕がやってみて、子山羊を取り返したら...」。

「一匹あげますよ」。

老婆は男に話をし終えてから別れた。しばらくして、彼女はこの男がイブナシーヤという名であることを知った。

このような次第で、イブナシーヤはある金曜日、人々がモスクに入り始めるのとは反対に、海に入ってオムツを洗い始めた。そこを通りかかった人が彼に尋ねた。

「一体全体どうしたんだい、イブナシーヤ。明け方からあんたはオムツを洗うのにずっと行ったり来たりしてるけど。みんなはもう金曜のお祈りに行き始めているぞ」。

「実はおやじが子供を産んだばかりなんだ」。

「あんたのおやじさんが子供を産んだばかりだって？」。

「そう、おやじが子供を産んだばかり」。

「そいつはえらく妙な話だな。いつから男が子供を産めるようになったんだ？」。

イブナシーヤは人々がお祈りを終えるまで仕事を続けた。そして彼はモスクに入って叫んだ。

「おやじが子供を産みました。明日お祝いをしたいので、みなさん来て下さい」。

「お前のおやじさんが子供を産んだって？」。

「そう、産んだよ」。

するとスルタンが言った。

「気はたしかか？イブナシーヤ」。

「はい、まったく正気ですよ」。

彼はお祝いの準備をするために立ち去った。

「今はまだお祝いを始められません。スルタンが来ないうちには食べ物を配るわけにはいきません」。

「それじゃ、スルタンを呼んで来い」。

人々がスルタンを呼びに行ったところ、彼はこう答えた。

「わしに構わないでくれ。立ち去れ！こんなことをきいたのはまったく初めてだ」。

人々がスルタンの言葉を伝えると、イブナシーヤは言った。

「だめです。お祝いを始めることはできません。スルタンが来なければいけません。この町では、どんなつまらないことでもスルタンの許しと臨席がなければやれませんから」。

そこでスルタンを呼びに人がやられた。スルタンは激怒しながら招待に応じてやってきて尋ねた。

「いつから男が子供を産むことになったのか言ってみろ。馬鹿げたことをするのはもうやめろ。いつから男が子供を産むようになったんだ？」。

「それじゃ、スルタン、あなたに言わせれば、男は子供を産めないということですか？」。

「その通り。そんなこと一度も聞いたことがない」。

「それじゃ、親愛なる町のみなさん、証人としてお願いします。若者に子山羊を返すようにスルタンに言って下さい。なぜなら、スルタンは、ここで今、自分自身で、雄が子供を産めないと表明したばかりだからです。スルタンは、若者の雌山羊が産んだばかりの子山羊を取り上げたのに、自分の雄山羊の子供だということでその行いを正当化したのです」。

スルタンはこの後自分の過ちを認めざるを得ず、子山羊を老婆とその甥に返した。イブナシーヤは老婆に言った。

「そういうわけで、子山羊を取っておきなさい。使われたのが卑劣な策略だということはわかってました。雄が子供を産むなんて話、僕も聞いたことがないですよ」。